

# 琉球大学学術リポジトリ

仲間と共に運動する喜びを味わう小学校体育科の授業実践—器械運動領域における異質協同の学びを通して—

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2023-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邊, 裕樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002019856">https://doi.org/10.24564/0002019856</a>

## 仲間と共に運動する喜びを味わう小学校体育科の授業実践

### — 器械運動領域における異質協同の学びを通して —

渡邊 裕樹

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・嘉手納町立屋良小学校

#### 1. はじめに

平成 29 年度に告示された学習指導要領における体育科の目標では、運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考・判断し、他者に伝える力を養うことが重視されている。課題を解決し他者に伝えるためには、学習過程の中で仲間と共に思考を深め、仲間との対話を通してよりよい解決策を見出していく主体的・対話的で深い学びが重要であると考えられる。

しかしながら、筆者のこれまでの実践を自己評価すれば、授業展開に応じて等質グループの集団を編成し指導することで、できる子供は高いレベルの技や場の設定に挑み、できない子供は少人数でひたすら反復練習することに陥らせてしまっていた。このように等質グループでの学習では集団を階層化し、他者とのよりよい交流を生み出すことができなかった。

他者との対話について、出原（2004）は「体育における異質集団による小集団学習の代表的なものはグループ学習であるが、この方法は子どもの自主的・集団的な能力に依拠し、これをそだてることも大きな目的として持っている。子どもたちが異質の小集団のなかで、自分とは違った『できばえ』や『わかり具合』を持った『異なる友だち』と関わり、集団としての力を学びのために発揮しながら学習を進めていく」と体育科において、能力差がある仲間と共に学習を進めていくことの重要性について述べている。

小学校体育の内容は6つの運動領域と保健領域から構成されている。その中でも器械運動系は主として個人で完結する運動種目と捉えられるが、陸上運動系のハードル走や持久走のリレー化のように「個人種目の集団種目化」を意図した教材開発が積極的に進められてきた。出原（1995）の「集団マット運動」をはじめ、最近でも上家ほか（2020）のようにシンクロマットなどの個人種目の集団化により仲間との交流学习を志向した授業実践が報告されている。

実際のクラスには、運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童、その反対に運動に主体的に取り組める児童など多様な児童が存在している。そのため、現行学習指導要領に基づいた児童の資質・能力の育成に向けて、運動することを拒否したり回避したりする児童や運動に意欲的でないといった児童を、運動に意欲的な児童とつなぎ合わせた異質協同の学びの授業実践を展開するにはどのような配慮や指導の工夫が必要であるのかを丁寧に検証していく必要があると考える。

#### 2. 目的

本研究では、運動に主体的に参加できない児童や運動が苦手な児童に着目して、異質協同の学びを中核においた器械運動の授業を組織することにより、児童にどのような変容をもたらすのかを実証的に研究する。これにより、多様な児童が共に運動する喜びを味わうための実践的な手立てや課題を明らかにしたい。



表1 抽出児童について

児童A	夏休み前までの児童Aは体育に参加することを拒んで、見学することが多かったと学級担任が話しており、体育の授業に参加できるのか学級担任も心配していた。児童Aは口数が少なく落ち着いているタイプである。スポーツクラブには所属していない。休み時間は本を読んで過ごしたり絵を描いて過ごしたりしている。女兒。
児童B	自分から物事を進んで行くことはなくいつも誰かが行動してくれるのを待っている。他のクラスの仲のいい子とは楽しそうに会話するが、クラスでは自分の机で静かに座っている。スポーツクラブには所属していない。絵や文字を書くことは得意でノートはいつも綺麗にとっている。女兒。
児童C	頑張り屋でクラスのリーダー的存在。困っている友達を優しくフォローしてあげることができる。学習に対しても意欲的で授業でも手を挙げて自分の意見を言うことができる。サッカー部に所属していて運動能力も高い。少し気が弱いところがあり、教員に確認してから動くことが多い。男児。

#### 4. 授業の実際

本実践の指導計画を表2に示した。1～2時間目は学習の流れを児童につかませたり運動の仕方を覚えさせたりする時間とした。3～5時間目はチームごとの課題を解決するために、チーム内の側方倒立回転が「できない」児童に合わせて教具や運動の場をチーム単位で選ばせることで、仲間と共に運動し、運動が苦手な児童が意欲的に活動できるよう努めさせた。6～7時間目はクラス全体で行うシンクロマット演技の完成に向けた取組を授業の中心におき、7時間目の授業後半で発表会を実施する形で授業を展開していった。最後の8時間目は、教室（学級）で7時間目の発表会の演技の録画を視聴し、一人ひとりの学びを共有することで次の単元や他の教科へ学習の成果をつなげられるようにした。

表2 本実践の指導計画

1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目	7時間目	8時間目
めあて・学習の流れを理解する	自分やチームの課題を見つける	うまくなる方法を考え実行する	うまくなる方法を考え実行する	うまくなる方法を考え実行する	発表会のリハースルをする	発表会を成功させる	学習のまとめをする
オリエンテーション	基本の運動・チーム会議						学習の振り返り・まとめ
	チームごとに側方倒立回転の練習					連続技発表会	
	クラス全体でのシンクロマット演技						
	振り返り・まとめ						

#### 5. 考察とまとめ

表3は、3人の抽出児がワークシートに記載した単元のまとめの抜粋である。児童Aは、「苦手なことにも挑戦したい」という体育観を獲得できたことが読み取れる。また、児童Aと児童Bの記述から共通して「できないは宝」という言葉が「できない」ことを恥ずかしながら意欲的に運動に取り組めた原動力になったと推測できる。児童Bと児童Cは単に「できる-できない」という技能獲得や習熟の結果に留まらず、友達にアドバイスしたり教えたりする活動にも嬉しさや面白さをもって活動できていたことが読み取れる。これらの記述から、一連の授業実践において、目指す異質協同の学びが仲間と共に運動する喜びを味わう児童の育成にとって効果的であることが示唆されたと考える。

図7は、毎回の授業後に行った「形成的授業評価」の総平均の結果であるが、単元の後半に向けて学級平均や抽出児の授業評価がともに高まったことが見て取れる。特にシンクロマット発表会の7時間目には学級平均や抽出児3人も全体を通して最も高い評価となっており、本研究が学級全体の思いの共有や高まりに繋がったと言えよう。

表3 抽出児の単元のまとめの記載

児童A	今までの体育の授業(マット運動)でいろいろなことができました。そくてんや連続技が上手にできていました。私は体育がめっちゃくちゃ苦手だったけど、体育が楽しいと思ったのは初めてでした。また、知らないことも知れました。私は「できない」ことははずかしいことだとおもっていました。でも「できない」は宝(下線筆者)だと知って、これからは、できなくても何度でもちょうせんしてみよう、何事でも文句を言わずにできばき行動をしていこうと思います。
児童B	マット運動を初めてやる時にみんなと同じように上手に出来るか不安だったけど、「できないは宝」(下線筆者)という言葉で、できなくても全然大丈夫なんだと思ひ安心してマット運動に取り組むことができた。グループとか協力をしたりしてくれたおかげでさらに安心してマット運動ができたのでよかった。まさか自分がグループの人にアドバイスをするとは思ってなかった(下線筆者)し、上手にできるようになるとも思ってなかった。体育の授業が楽しいと思ひたのがあまりないし、いつもと違う先生との体育や授業の仕方だったので、私はとてもいい経験ができてうれしいです。
児童C	マット運動でチームワークも高まったし、 <u>みんなのできるこゝろが増えてよかった</u> です。(下線筆者)チームワークが高まったので、運動会でもこれを生かして6-●(筆者加工)が一番目立てるようになりたいです。1年生も側転をしているときいたので、1人でもいいからできるように教えたいです。

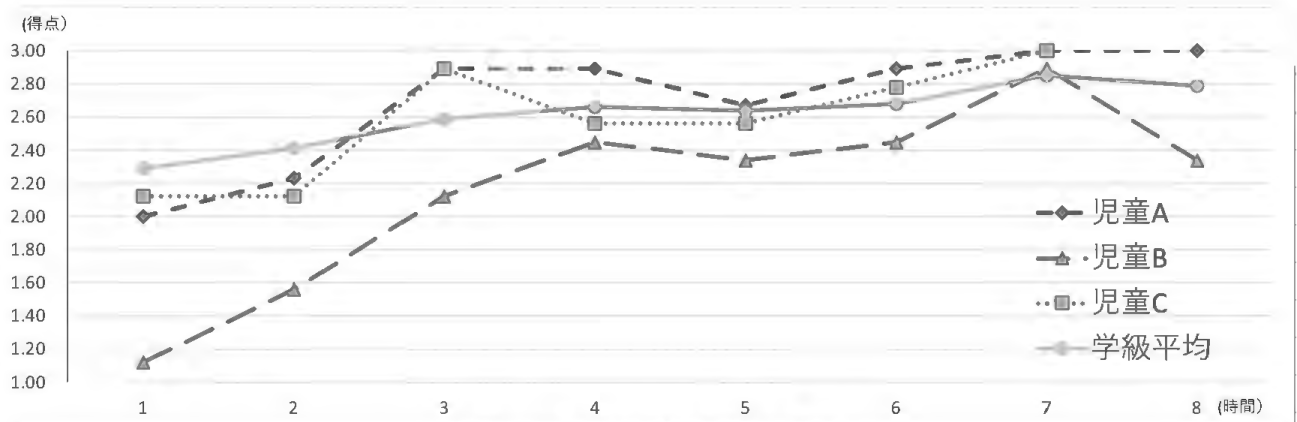


図7 形成的授業評価の推移

本研究の課題は、自分以外の友達の成長を具体的にワークシートに書くといった、かかわり合いの質を高める手立てが不十分だったことである。仲間の成長を自分の成長のように喜び、仲間と共に運動する喜びを味わう児童を育成するために、児童のワークシートへの振り返り方を工夫したり授業でのつぶやきを教師が丁寧に把握したりして繋いでいく必要がある。

また、本研究はわずか一単元での抽出児の変化しか追うことができておらず。数領域を通して学級の児童全員がどのように変容していくのかを明らかにする必要がある。ワークシートなどを使って質的に見取っていくことはもちろんのこと、意識尺度などの量的データからも変容を明らかにしていく必要がある。次年度の課題としたい。

## 引用文献

- 長谷川悦示・高橋健夫・浦井孝夫・松本富子, 1995, 「小学校体育授業の形成的評価票及び診断基準作成の試み」『スポーツ教育学研究』14(2): 91-101.
- 出原泰明, 1995, 「集団マット運動」阪田尚彦ほか編『学校体育授業事典』大修館書店, 653-656.
- 出原泰明, 2004, 『異質協同の学び-体育からの発信』創文企画, 78.
- 上家卓・吉川博人・秋月茜・黒河あおい・神林 勲, 2020, 「小学校高学年におけるシンクロマットの指導実践—マット運動への好感度および運動有能感, 児童の意識の変化に着目して—」『北海道体育学研究』55: 19-29.